

# 今月の 我がマチの 一番星☆

今月からシリーズで  
安平町の人を紹介するコーナーを設けました。

千羽鶴を中学生の生徒に託す  
(8月5日)



井森みゆきさん

広島へ

平和の願いを込めて

「子どもたちに折り紙を教えたのが始まりです」と30年ほど前を振り返る井森みゆきさん(追分花園)。当時、旧追分児童館で児童厚生員として働いていた井森さんは、下校後に学童が集まり帰宅時間まで折り紙などの指導をしていたといいます。

昭和61年に旧追分町が核兵器廃絶の町を宣言。8月6日の広島平和記念式典に小学生と中学生を派遣することになりました。以来、児童館に来る子どもたちと一緒に千羽鶴を折り広島市に行く児童生徒に毎年託しています。

井森さんの小さな取り組みに共感し学校でも鶴を作ることになりました。仕事を辞めた後も自宅で千羽鶴づくりに専念。「下手でも子どもたちの平和への思いが詰まった1羽

現地で学ぶ貴重な体験

1羽の折り鶴に感激することもあり、二度と戦争を起こさないように願っていたですわね」と話し、先の大戦で親族を亡くした井森さんですが、優しい口調の中に反戦への強い決意が感じられました。

戦争を知らない人が増えて

きた日本では、安易に人を殺すことに心を痛めているという井森さんは、もつと人の命の大切さを考えてみてほしいと警鐘を鳴らします。事前学習で戦争について調べ、各自がテーマを持って広島市へ出発した児童生徒は、研修先で戦争を体験した方から貴重な話しを聞き、多くの

日本人が一瞬にして亡くなった様子や後遺症に苦しむ患者さんを撮った写真を見るなど教科書では分からないことを学び、帰って来てからの報告会。「子どもたちには平和の意義を肌で感じてくれることを期待しています」とこの事業の取り組みを評価していました。

体力が続く限り続けたい



菅原芳子さん

「12日間で早来市街を一巡しながら道路に捨られたごみを拾っています」と話す菅原芳子さん(早来大町)。「あまり化粧はしないんですよ」と恥ずかしそうに笑い、日焼けした顔に白い歯が目立っていました。

早朝からごみ袋と火ばさみを持つ毎日。日曜日と雨の日、そして雪が積もる時期以外の日課とのことです。東京生まれの菅原さんは北海道の自然や人の温かみを実感。17年前に近所の人と始めたウォーキングでしたが、道端などに散乱している空き缶やタバコの吸い殻などに心を痛め、15年前からごみ回収を始めました。「汚れたびんや缶などは洗って分別し、大型ごみは役場に連絡しているんです」と苦労話を聞かせてくれました。

歩くことを苦にしない菅原さんですが、大正生まれのご主人の末吉さんも健脚の持ち主。夫婦で旅に出ると二人で歩くそうです。洞爺湖を一周したり、8時間かけて早来から日高門別まで歩いたことを回想します。ごみ拾い中、運転免許証と財布が入った袋を見つけ警察に届け持ち主に感謝されたことや、登校中の小学生からあいさつや励ましの言葉をかけられることも多く、これまで続けてきて良かったと感じています。



ごみ拾いの途中、  
地域の人と会話

「兄妹は私より若く他界しましたが、お前は、もう少し長生きして人様のお役に立てるように」と見守ってくれているようで、体力が続く限り継続したいですね」と目を輝かしながら町の景観を見つめていました。